



Title	＜翻訳＞手なし娘
Author(s)	吉本, るり子
Citation	モンゴル研究. 2025, 34, p. 48-50
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103477">https://doi.org/10.18910/103477</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《翻訳・昔話》

## 手なし娘

(訳) 吉本 るり子

むかしむかし、海の北に王さまの国がありました。海の北の王さまには15歳の王女がいました。王女は太陽も見えず、風も吹きこむことのないガラスの館で、気ままに暮らしていました。海の南にもまた、王さまの国がありました。海の南の王さまには15歳の王子がいました。その王子は、海の島にある庭園のなかの館に住み、書物を読み勉学に励んでいました。

ある時、海の北の王さまは、3年の任務で家を留守にすることとなりました。家を立つとき王妃に、「では私の娘をよろしく頼む。3年たったら帰ってくる」と言いました。

王妃は、王女の継母でした。王女を嫌い、王女に危害を加えることをいつも考えていました。そうしたところ、ある日、王の館で穀物の収穫をしていると、穀物の中から一匹の大きなネズミが出てきました。ネズミをつかまえて王妃に見せると、王妃はネズミを殺させ、前歯を折り、その前歯を取って置きました。

そうこうして、3年の任務を終え王さまが帰って来ました。

「私の娘は元気だったか？」と王妃にたずねると、王妃は「元気だったでしょう。あなたの娘がこのような歯をもつものを産みました」と言って、例のネズミの前歯を取り出して見せました。王さまはそれを見て、大そう怒り、娘を呼んで来させ、牛車に乗せ二人の従者に連れて行かせました。

王さまは自ら刀をとぎ携えて、その後を追いかけて海辺に行き、娘を牛車から降ろし殺そうとしました。娘は泣いて「殺さないでください」と父親に命乞いをしました。父親は殺すのをやめ、両腕を切り落とし、娘を置き去りにしました。

王女は両腕を失い悲しんで、海に入って死のうと身を投げましたが、溺れることなく浮かんで流されて行きました。

ある日、海の南の国の王子が庭園の端を散歩していると、海の方で人が流されて行きました。海から引き上げてみると、肩から手のない娘でした。「君はいったいどれなの？」と王子が尋ねると、

「父親が私を殺そうとしました。私が命乞いをすると、両腕だけ切って置き去りにしました。私は水に入って死のうと思い海に転がり落ちたけれど、溺れずに浮かんで漂い、流されてきたのです」と言いました。王子は娘を館に入れ、腕の傷の手当をしてやり、娘と一緒に暮らしました。

そうしたある日、皇帝のお触れが出て、右翼の官吏が亡くなったため、息子を持つ王の王子たちを集め、試験が行われることになりました。王子は皇帝の試験を受けに行き、優秀な成績を収めて、皇帝の右翼の官吏に選ばれました。王子が家を出るとき、手なし

娘は王子の子どもを身ごもっていました。子どもを産んで3年が経ち、王子は数ヶ月の休暇を貰って家に帰って来ることになりました。そして、「何月何日に家に帰る」と記した急ぎの手紙を使者に託しました。使者は道中一軒の家に立ち寄りました。その家には中国人と女が住んでいました。二人は示し合わせ、使者に酒を飲ませ眠らせて、手紙を奪い読んだところ、皇帝の右翼の官吏が両手のない妻に宛てた手紙でした。この中国人の妻は手なし娘の継母でした。「いや、両手のない娘というのは例の娘かも知れない。手紙を書き換えておこう」と考え、「私が帰るより先に、手なし娘を追い出せ」と書いて手紙を元のように戻しておきました。使者は起きて王さまのところに行き、手紙を渡しました。王さまは手紙を読んでたいそう怒り、「どういう訳で救い、どういう訳で追い出せというのか？ともかく息子の妻と子どもをザヤタイン寺に連れて行って置いてこよう」「息子が帰ってきてからどうするかを決めよう」と考え、手なし娘を子どもともども連れて行き、置いて帰りました。寺に残された娘は考えました。

「私を騙してここに置いていった。あとで私を殺すつもりだろう」と子どもをおぶって寺から出て行きました。そうこうして息子が家に帰って来ました。父の王は怒って息子を殺そうとしました。息子は事の次第を話しました。それならば急ぎの手紙を届けた使者を呼び、尋ねる必要があるとして来させたところ、急ぎの手紙の使者は、かくかくの家立ち寄りましたと言いました。それで中国人と女を捕え連れてきて尋ねると、二人は手紙をすり替えたことを白状しました。それで女の首を切り、中国人には杖をつかせ水のないゴビに追放しました。それから妻を救いにザヤタイン寺に行きましたが、妻はいませんでした。

「ああ、もういなくなったのだからどうすることもできない。しかし、1、2か月の間、貧しい者たちに食べ物を配ることにしよう」と考え、領内に施しのお触れを出しました。

手なし娘はこの施しのお触れを聞いて、「この施しに行けたらいいのだが、私の素性がすぐわかってしまう」と思い、子どもをおぶって、海に沿って歩いて行きました。ある日のどが渴いてたまらなくなり水を飲もうとしましたが、低い水辺を見つけることができませんでした。「仕方がない」と子どもをある場所に座らせておいて、自分は水面の方へと頭を下げました。手なし娘はあっという間に水の中に落ちてしまいました。すると落ちた側の腕が生えてきたような気がしました。娘が起き上がって見ると、片方の手がありました。娘は喜び、それでまた頭を下げた反対の側から水に落ちると、もう片方の手も生えていました。娘は両手を得て喜びました。「そうだ！これなら私だと気づかれまい」と息子をおぶって施しの場所に行きました。父の王さまの館に行くと、塀の入口のところで母の王妃が車に積んだ金銀を貧しい人々に配っていました。娘が息子とともに王妃のそばに行くと、王妃の衣のすそをつかんで、「お母さん、お母さん」と大声を出しました。

王妃は驚き、子どもと娘を見ると、手なし娘とそっくりで、しかも娘には両手がありました。王妃は王さまと王子を呼びに行かせました。ふたりは出てきて娘を見て、娘だと知り、家に連れて入ってお祝いの宴を開きました。そして、王子は妻と子どもを連れて皇帝の任務に行き、そこで楽しく幸せに暮らしました。

原題 Гаргүй хүүхэн

出典：Монгол ардын үлгэр, Улаанбаатар：Улсын хэвлэлийн газар，1982.

同書の解説によるとこの話は、昔話（үлгэр）の語り部（үлгэрч）トグトール Тогтоолの昔話集 "Ардын аман зохиолын эмхэтгэл, 1949" に掲載されたものである。

.....

「手なし娘」の昔話は、『グリム童話』として知られているグリム兄弟の収集した昔話集にもあり、類似の筋書き、モチーフをもつ話が世界的に広範に存在する（アメリカの民俗学者 Stith Thompson の "The Types of the Folktale" では分類番号 ATU 706 に分類されている）。また、地域、地域で様々なバリエーションがある。日本の「手なし娘」の話でも、日本の村が舞台ではあっても、手なし娘が村の酒屋の娘で相手が別の村の酒屋の若旦那だったり、手なし娘が峠の茶屋の娘で相手が獵師だったり、聞き手の心に浮かぶ情景が異なるのだ。

モンゴルの「手なし娘」の昔話（үлгэр）も、この翻訳の上記の出典の話と、日本語訳のある『モンゴル民話研究』（D. ツェレンソドノム編；A. ロブサンデンデブ監修；蓮見治雄訳註）掲載の「手なし娘」とは細部がかなり異なる。モンゴルの「手なし娘」の昔話（үлгэр）を集めて見たいと思う。モンゴルの豊かな口承文芸の世界への私の第一歩として。

（よしもと るりこ）